

I 事業の概要

- 1 研究テーマ 地域づくりの担い手育成に向けた住民の連携・協働
～災害に負けない地域コミュニティの形成～
- 2 趣 旨 地域づくりや人づくりを推進する生涯学習・社会教育の中核を担う社会教育主事等の専門性を高めるとともに、関係する行政職員（生涯学習関連施設を含む）や社会教育委員等各種委員、社会教育団体関係者等が一堂に会して、地域の生涯学習・社会教育を推進する上での課題と、その解決に向けた方策について理解を図る。
- 3 主 催 北海道教育委員会 北海道立生涯学習推進センター
- 4 後 援 北海道社会教育主事会協議会
- 5 期 日 令和元年(2019年)5月30日(木)～5月31日(金)
- 6 会 場 道民活動センタービル「かでる2・7」(かでるホールほか)
- 7 参加対象 市町村及び市町村教育委員会職員、各種審議会委員（社会教育委員、生涯学習審議会委員等）、社会教育関係団体職員、生涯学習関連施設職員（公民館主事、図書館司書、学芸員）等
- 8 参加状況

ブロック	道央			道南				道北			道東				道外
管内	空知	石狩	後志	胆振	日高	渡島	檜山	上川	留萌	宗谷	オホーツカ	十勝	釧路	根室	
参加者数	20	45	13	13	13	12	10	28	5	5	22	20	10	4	3
ブロック 人数	78			48				36			55				3
合計	220														

9 プログラム

		9:30		10:00		11:10		11:45		13:00		13:50		15:30		17:15		
1 日目 5 月 30 日 (木)		受付	開 会	行政説明		テーマ 説明		昼食・休憩		パネ ル ト ーク		講演		研究協議①				
													基礎講座					
2 日目 5 月 31 日 (金)	説 明	事例紹介Ⅱ			研究協議②				閉 会									
		①	②	③														
		基礎講座																
		9:10	10:00		11:00		12:15		13:00		14:00		15:00		16:00		17:00	



(1) 行政説明

「社会教育を取り巻く最近の動向ー人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策についてー」

講師 文部科学省総合教育政策局地域学習推進課課長補佐 下 田 カ 氏
〔1日目 10:20～11:20 かでるホール〕

平成 30 年 12 月 21 日に発表された中央教育審議会答申「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」に基づき、生涯学習、社会教育の推進についての国の動きについて説明された。

初めに、本答申が日本の社会が右肩上がりだった、例えば前の東京オリンピックが行われた 1964 年頃と現在の社会状況学校教育、社会教育を比較し、これから教育行政はどのようなことに取り組み、社会ではどのような活動をするとういのかをまとめたものであると確認された。

次に、急激な社会の変化として、120 年前の蒸気機関誕生、60 年前のオートメーション化、30 年前のインターネットの普及、現在の A I 化によって働き方や生活スタイルが変化してきたことを根拠に、120 年、60 年、30 年と変化するスパンが短くなっていることを示し、その時代、その状況にあった教育のスタイルは、学校教育と社会教育が一緒に進めて行くことであると説明があった。コミュニティ・スクールや地域学校協働を例に挙げ、社会に開かれた教育課程を進めることは、地域と学校を繋げ、地域住民の活躍の場、地域住民の学び直しの場を生み、答申の基本理念の「ひとづくり」「つながりづくり」「地域づくり」の循環、地域の活性化につながると説いた。

また、本研修会サブテーマの「防災」にも触れ、地域住民の学び増しの機会として分かりやすいものであるとした。

最後に、地域における連携・協働には当事者間の目標設定し目標を達成するまでの工程を考えることが不可欠であると強調されていた。



(2) 事例紹介 I 「胆振東部地震被災地の現状について」

パネリスト 厚真町教育委員会 斉 藤 烈 氏
パネリスト むかわ町教育委員会 飛 岡 雅 幸 氏
パネリスト 安平町教育委員会 大 橋 祐 翔 氏
コーディネーター 北海道立生涯学習推進センター 五十嵐 秀 介
〔1日目 13:00～13:45 かでるホール〕

昨年 9 月の「胆振東部地震」の被災から現在までの様子が、厚真町・むかわ町・安平町の教育委員会の 3 名の社会教育担当職員からパネルトーク形式で紹介された。

＝要旨＝

1. 伝えたいマチの様子～1 枚の写真から～

最初に 1 枚の写真をもとにパネリストが伝えたいマチの様子が紹介された。

むかわ町：飛岡氏

- 写真は、避難所で地域住民が料理を作っている様子。手前では、地域に住むご夫婦が唐揚げを揚げてくれている。
- 毎年、実施している通学合宿の初日の夜に、地震が発生し、写真は、2 日目の夕方の様子。通学合宿の 3 日分の食材があり、町内のスーパーマーケットからも食材の提供があった。
- まだ電気は通っていないく、電灯は、近隣の農家の方が自分の納屋から発電機と投光器をもってきてくれた。その明りを頼りに地域の皆さんで炊き出しの準備をしていた。



厚真町：斉藤氏

- 写真は、震災後、避難所の横に作った子どもの居場所の様子。
- もともと何もなかった原っぱに震災の三日後くらいにテントとタープを立て、椅子が焚火を囲んで円形に配置され、子どもが集まれる場所を作った。
- 特に子どもたちがここに集まらなくてもよくて、それぞれ「やる」、「やらない」を選択している。写真では、子どもたちはただ単に日向ぼっこしている。



- ・ 写っている女性は、大学生で地震の直後に来町し、子どもたちと一緒に井戸端会議を開いている様子。こういった光景は日常的になくて、こういう場があったからこのような場ができているのではないだろうか。

安平町：大橋氏

- ・ 写真は、安平町の小学校6年生立ち上げた「8千人の笑顔プロジェクト」の活動の様子。このプロジェクトは町民の数と同じ数の笑顔を集めて町全体を元気にしようという取組。
- ・ 写真は実際に小学生たちが、福祉施設に行き、その利用者に「写真撮らせてください」、というお願いと企画の趣旨を説明している様子。
- ・ 安平町では、安平町ふるさと教育学社融合推進事業という事業を行っており、震災の前には学校の前庭の池を復活させようというプロジェクトをやる予定だったが、地震によりそのプロジェクトができなくなった。
- ・ このプロジェクトは、何か自分たちにできないだろうか子どもたちが考えたプロジェクト。子どもたちにとって良い成功体験になった。



2. 震災を受けて、考えたこと、感じられたこと

被災当時の御自身の様子やその中でまず取り組んだこと、また行動にあたって、意識したこと、また、実際に復旧活動する中で感じたことが紹介された。

厚真町：斉藤氏

- ・ 子どもの居場所づくりについて、「居場所づくりのきっかけ」「途中経過」「問題点」の3つが紹介された。

「居場所づくりのきっかけ」

- ・ 被災から2日目以降に、「子どもたちの遊ぶ場所がないから何とかならないか」という課題があり、当時嘱託職員で避難所運営に携わっていなかった斉藤氏が子どもの居場所づくりを担当することとなった。
- ・ 職員は避難所を運営に注力しなければならないことから、災害が起きたときに正職員ではない誰かを動かすことがきっと必要になってくる。外部の団体とか自由に動けるキーパーソンをつかんでおくことが大事だと感じた。



「途中経過」

- ・ 本来、実施することが難しいことを職場の理解を得て、実施することできた。（個人的な知り合いに馬を連れてきてもらったり、焚火をしたりするなど）
- ・ 子どもの居場所を運営していく上で、職場の理解、人のつながりが非常に大きかった。

「問題点」

- ・ 子どもたちの居場所は避難所の横にあり、近くにある川で遊んだ子供が汚れた状態のまま避難所に入り、避難所が汚れる状況があり、苦情が出たことがあった。
- ・ 被災していない子どもが居場所に来て、避難所のトイレだけを使う場面もあり、避難している方の感情を乱す場面があった。
- ・ その瞬間、その瞬間の判断で動いていたので、後から振り返ったときにこれをやって良かったのかとか本当に必要だったのかと今でも考えてしまう。

安平町：大橋氏

- ・ 町内で予定していた社会教育関連事業がすべてできなくなったことで、通常業務がなくなり、避難所運営に注力することができた
- ・ 被災後約10日後に電気が通り、被災地として安平町、厚真町、むかわ町が報道されているのを知った。自分のマチがよく考えたら被災地になったんだなという実感が沸いたと同時に、そういう風に取り上げられるのがちょっと嫌だと感じた。
- ・ 今、振り返ると被災当時は、日々が必死だったためか、「つらい」という感情が芽生えたのが、結構、後になってからだったことに気付いた。
- ・ 「8千人の笑顔プロジェクト」は、子どもたちが発信して行っていた事業でしたが、安平町で進めてきた「ふるさと教育」がしっかり地域に根付いていたことを改めて感じた。
- ・ 良い側面ばかりがフォーカスされるが、その裏で、町民は様々なネガティブな部分を抱えて日々を過ごしている。実際に安平町の人口は、被災前に比べて人口がおよそ200名減少している。



- ・ 役場の職員は町のために働かなければいけないので、自分の家族に寄り添ってあげられないことが多かった。

むかわ町：飛岡氏

- ・ 大雨災害などはある程度予想がついて事前に準備できることもあるが、突然来る大地震というのは、全く想定外で避難訓練はこの大きな災害には何の役にも立たないと感じた。
- ・ 一番想定外だったのは、避難物資の量だった。避難物資を処理するための人数が足りなかった。町外からの応援職員のおかげで処理ができた状況だった。
- ・ 地域の方々と一緒に活動できたことが非常に良かった。教育委員会の前に農政課に9年いたことで、町内の農家の8割9割の人とつながりがあり、いろんなことに対応できた。
- ・ 組織の中では、その場、その場で判断し、指示する立場の職員の存在が重要であることを感じた。
- ・ 職員も大変な状況が続き、体調を壊して入院したり、3月で退職した職員も何人もいた。
- ・ 飛岡氏自身は、通学合宿の参加者を迎えにくる保護者の対応する傍ら、通学合宿の会場だった避難所を一人で3日間自宅に戻ることなく運営していた。



3. それぞれのマチの展望

震災から半年が経ち、復興、復旧が進むマチの今後についてそれぞれのパネリストからお話いただきました。

安平町：大橋氏

- ・ 震災の前から準備を進めていましたが、子どもたちだけでなく、青年層も含めた学びのサポートを進めていく「世界に一番近い町というプロジェクト」、森を使ったプレーパークを新しくつくり、そこで子どもたちを自由に遊ばせ、子どもたちにクリエイティブは発想できる力つけていこうという「遊育推進事業」、クラウドファンディングを安平町で運営し、町民がやりたいと思っていることを発掘し、サポートしていく「開拓事業」の3つの事業をスタートさせている。
- ・ 震災により仮設校舎を使用している早来中学校を義務教育学校なども視野に入れ、小、中学校を1つの校舎として、再建を進めている。
- ・ 4月に、安平町の中核となるような施設として道の駅がオープンした。ここも、中心にいろいろな事業を展開していきたい。
- ・ 復興の第一歩くらいの段階で、課題はまだたくさんあるが、被災というピンチをチャンスにかえ、いろいろな事業を展開し、安平町をどんどんいい町にいい方向に進めて行きたい。

むかわ町：飛岡氏

- ・ むかわ高校野球部員は、仮設の寮に避難している。その状況の中、支援物資の運搬や農家の壊れたハウスの片付けといったボランティアを一生懸命やってくれている。ぜひ、また輝けるときがあってほしい。
- ・ 被災地にいろんな人がくるのは、職員としては大変なところたくさんあるが、これが縁でいろいろな方とつながることができた。6月にも大きなイベントが2つ3つあり、道内の方々、芸能人の方々、スポーツ選手の方々、たくさんの方に被災地を元気づけようと訪れてくれている。
- ・ むかわ町長は「いきなり、ピンチがチャンスにならないのではない、ピンチをヒントに、ヒントをチャンス変えていこう」と話している。復興は、始まったばかりでこれから何年かかるかわからないが、地域の方と一緒にマチの復興に努めていきたい。

厚真町：斉藤氏

- ・ 今、町民が求めていることは「普通」に戻る事だと思っている。震災以降、地震があったからこういうことやろうという話がたくさんあった。いい意味でも悪い意味でも普通に一回戻ってみることが重要だと思う。
- ・ そろそろ支援するとか支援されるとか上下の立場が出てくるような表現は終わりにしたい。厚真町にきて方も町民もどちらもこうハッピーになるようなつながりができると非常によい。
- ・ 今、求められているのはプレーヤーではなくて、コーディネートする人。町外の人間と町内の人間をこう上手につなぐようなコーディネート機能を誰が担うか、というところが非常に大きな問題です。社会教育がこの機能を担うことができるのではないかと考えている。
- ・ 現在、放課後児童クラブ中心に子どもの遊び場を町民と子どもと町外の人と保護者の方々、いろんな人を交えて、手作りできちから作っていくという事業を始めようとしている。

(3) 基調講演「防災を起点とした地域コミュニティの形成

～地域づくりは、知域づくり（マッピング） 知人づくり（仲間） 智人づくり（学習者）～

講師 コミプロデザインファシリテーション研究所所長
内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三氏
〔1日目 13:55～14:15 かでるホール〕

小学校長、社会教育主事、公民館長を経験し、現在、民間団体の代表を務める講師から、講師自身が2016年の熊本地震を経験したことをもとに、防災を起点とした地域コミュニティの形成に必要なことについて伝えられた。講演の中では、避難所となった公民館を例にあげ、日頃から地域住民の学びの場として公民館職員と交流があった公民館が、貸館業務が中心で地域住民との交流が少なかった公民館に比べてスムーズに運営ができたという事例や講師自身が震災を機会に隣人との繋がりが深まったことなど、人と人とのつながり防災、減災につながった事例が紹介された。また、クロスロードなどの防災教育のツールを紹介し、日頃から考える習慣をつけることがその時、その時の判断が求められる震災時に生かされるといった行政職員として必要なスキルについて説かれた。



＝要旨＝

導入～事例紹介1（パネルトーク）を受けて

- ・通学合宿には自立型と交流型がある。交流型は、「もらい風呂」プログラムなど地域の様々な人と交流することができる。特別に防災教育をするのではなく、日常的に地域住民をつなげておくことが防災につながる。東北の震災の時の例としてフラダンスサークルのお年寄りがフラダンスのネットワークで全員助かった。特別に作ったネットワークではなくて、日常に使っているネットワークが機能した例である。機能しない特別なネットワークをつくるのではなく、ワークするネット「ワークネット」を作ることが重要である。
- ・熊本地震のときは非正規職員の公民館長だった。非正規職員には自由に動ける時間があり、自由な時間に情報を仕入れ、業務に活かすことができる。フットワークの良い非正規職員がいること、正規職員であっても、業務を与えず、動ける職員がいることが大切である。
- ・安平町の8,000人プロジェクトのように日頃からつながっていることが大切である。熊本地震で避難所になった公民館のうち、日頃から地域住民との交流がある公民館は、貸館中心で地域住民との交流の少ない公民館に比べてクレームが少なかった。

地域づくり（マッピング）・知人づくり（仲間）・智人づくり（学習者）について

- ・地域づくりは自分の地域がどういう特性があるかってことを知っておく、マッピングしておくことが、一番大切である。トップの人にみんなが付き従うというようなコントロール型のマッピングではなくて、皆で考えながらどこが一番効果的なのかと考えて結論を出すマネジメント型のマッピングが大切である。（地域づくり）
- ・人口減少よりも良い人間関係ができてない無鉛社会の方がやっぱり怖い。やっぱりあのおばあちゃん大丈夫かなと言って見に行ってくれる地域の人たちがいる、お年寄り同士がサポートする環境を作っておくことが大切。（知人づくり）
- ・智人作りは、こんな時には、どうしたらいいかをみんなで考えることが大切である。ここで〇〇が起きましたどうするかを即興的に判断する訓練をすることがゲーム的に面白いと言われている。

熊本地震からの教訓

- ・防災訓練の経験は、役に立たない。公民館、地域、学校の連携といった日常的につながっていると、具体的な行動につながる。
- ・特別な配慮が必要な専用避難所の必要性。自閉症の方とか、集団の中にいるとストレスになる方の避難所が特設でできました。
- ・想定しなかった車中泊避難者へ柔軟に対応するには、ピラミッド型よりアメーバ型のマネジメントが大切である。
- ・コミュニティ・スクールや地域学校協働が推進されていた校区の避難所は避難者による自主運営ができた。
- ・日頃から即興的な判断力をつけておくことが大切。決まったパターンをつくるよりもこんなときはどうする、こんなときはどうするっていうパターンをつくっておくことが重要である。

(4) 研究協議「地域コミュニティの形成に向けた社会教育行政の役割」

ファシリテーター 北海道教育庁各教育局社会教育指導班

〔1日目 14:30～17:15／2日目 9:10～12:15 各会場〕

① 研究協議の目的

サブテーマにある「防災教育」が社会教育行政のゴールではないことを認識した上で、基調講演、事例紹介Ⅰを参考にしながら防災教育、防災の取組をきっかけとした地域コミュニティの形成について協議し、地域コミュニティを形成する上での社会教育行政の役割について改めてふりかえる。

② 研究協議の概要

ア 研究協議のテーマ

地域コミュニティの形成に向けた社会教育行政の役割

イ 各研究協議会場の参加者の構成

研究協議会場への参加者の割り振りは、社会教育行政の経験年数をもとにした。

第1会場・第2会場	社会教育行政の経験がおおよそ3年未満の参加者 ※2日目、社会教育基礎講座受講者が合流。
第3会場	社会教育行政の経験がおおよそ3年以上6年以下の参加者
第4会場	社会教育行政の経験がおおよそ7年以上の参加者

ウ 研究協議の形態

- ・研究協議のテーマを全会場同一テーマの「分散会」の形態。
- ・各グループにおける成果物は作成せず、参加者一人一人が研究協議の中で得たものを地域に持ち帰り、実践につなげる。

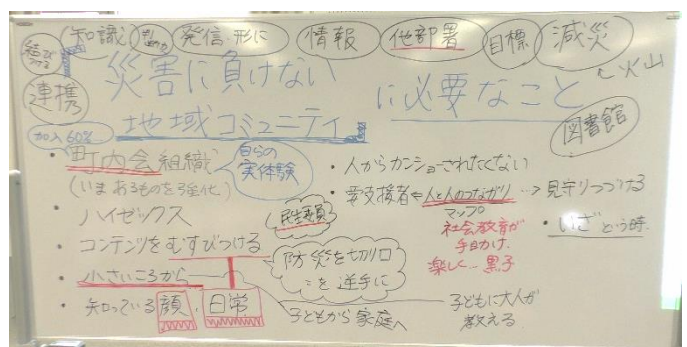
エ 研究協議の内容

〔1日目〕

研究協議の1日目は、最初にグループの中で、それぞれが抱く「地域コミュニティ」のイメージについて確認した。それぞれが付箋に書き出し、グルーピングしてまとめた。次に「災害に負けない地域コミュニティ」のイメージをグループでまとめ、それには何が必要なのかを協議した。

〔2日目〕

研究協議の2日目は、研究協議に入る前に「社会教育行政以外」の防災につながる取組についての事例紹介をきいた。事例紹介を聴く視点は「社会教育行政は、それぞれの取組にどのようにかかわることができるか」とした。事例紹介を聴いた後、グループ内で事例紹介の視点をもとに「自分だったらどのように事例を活用するか」などについて交流した。次に1日目にグループで協議し、整理した「災害に負けない地域コミュニティ」に必要なことについて、全体共有した。最後に、それぞれの参加者一人一人が「期待する10年後の地域コミュニティの姿（災害に負けない地域コミュニティ）」「災害に負けない地域コミュニティを形成するために必要なこと」「災害に負けない地域コミュニティ形成のため、明日から取り組むこと」を考えた。



(5) 事例紹介Ⅱ『行政と住民の連携・協働』につながる取組～地域コミュニティ形成ツールとしての防災等の取組」〔2日目 9:25～10:25 各会場〕

① 事例紹介Ⅱの目的

社会教育行政以外で行われている「『行政と住民の連携・協働』につながる取組を紹介することで、それぞれの地域における行政間ネットワークについて改めてふりかえる機会とする。

② 事例紹介Ⅱ概要

ア 紹介の方法

- i 事例は3会場、7事例同時にポスターセッション形式で発表する。
- ii 1事例1回15分間（質疑応答含む）3回繰り返し発表する。
- iii 参加者は自由に3事例を選択し、事例をさく（途中移動可とした）。

イ 事例紹介Ⅱの内容

i 北海道の防災教育の取組について

北海道総務部危機対策局危機対策課主任 土屋 保真 氏

北海道の防災行政の企画及び総合調整、災害対策などに取り組む北海道総務部危機対策局危機対策課から、教育部局と連携して実施している「1日防災学校」などの北海道における防災教育の取組事例、北海道防災教育アドバイザーや北海道地域防災マスターなどの人材活用、育成事業についての紹介があった。また、防災に求められる地域コミュニティの形成には、日常の地域住民同士の繋がりが不可欠であることが説明された。



ii 防災関連事業への支援について

北海道総合政策部地域振興局地域政策課主査 範国 修史 氏

北海道の地域振興施策の企画及び総合調整など担当する北海道総合政策部地域振興局地域政策課から、地域課題の解決や地域活性化を目的として取り組む事業に対する交付金制度、「地域づくり総合交付金」についての紹介があった。この交付金により、地域の自主防災組織の充実や住民の自発的な防災活動に対して財政支援を行うことができることや交付金の対象となる事業、限度額、対象経費などについて説明があった。



iii 水防災の取組について ～逃げ遅れ“0”へ向けた取り組み～

北海道建設部建設政策局維持管理防災課 山崎 大志 氏

全国での洪水被害や平成28年8月に北海道でおきた豪雨被害の事例をもとに公共土木施設に係る防災体制の整備に関すること、道路、河川、港湾等に係る防災施設整備の推進及び市町村施設整備の支援に関すること、津波防災まちづくりに関することが紹介された。それぞれの市町村において、水防災の正しい情報を地域住民に伝えていくために関係部局と教育部局との連携が必要であると説明があった。



iv 民生委員が進める地域の支え合い ～住民支え合いマップの取組から～

公益財団法人 北海道民生委員児童委員連盟主査 馬川 友和 氏

民生委員は、児童委員を兼ね、厚生労働大臣から委嘱された非常勤特別職の地方公務員であるという民生委員児童委員の身分や担当区域内の地域住民の実態や福祉ニーズを日常的に把握するといった地域における活動について紹介された。また地域における民生委員の活動や住民同士をつなぐ取組事例として「住民支え合いマップづくり」が紹介された。住民支え合いマップは住民のふれあいや支え合いの実態を地域住民から聞き取り、地図に落とし込んで作成していく。その結果から地域でどんなことに取り組んだらよいのかを考える地域福祉推進の手法であり、災害時の安否確認にも活用されていることが説明された。



v 町内会自主組織の取り組みについて

一般社団法人 北海道町内会連合会事務局主幹 吉村 美由紀 氏

北海道町内会連合会の役割と町内会活動の活性化を図るための助成事業について紹介された。助成事業の中で特に「災害に強いまちづくり全道運動」について説明があった。この助成事業は住民主体の防災活動に取り組む町内会等への助成を行い、平成 30 年度は 100 町内会が実践している。町内会における防災の研修会は講義型より実践型が増えている傾向があること意識が高まっている反面、マンネリ化などの問題点があげられ、町内会のみではなく、あらゆる関係機関との連携が町内会の防災活動の次のステージとして求められていることが説明された。



vi 図書を活用した防災の普及啓発について

北海道立図書館北方資料課主事

藤田 さやか 氏

まずは、施設における安全管理の視点から、開館時間に地震が起きた時の来館者の安全確保の体制について説明があった。また、北海道胆振東部地震における道立図書館の支援活動として安平町や厚真町の図書館の復旧支援についての紹介があった。地域住民への防災に関する普及啓発の取組として、防災に関する図書の紹介コーナーを設けたり、防災の日に防災に関した読み聞かせをしたり、災害の記録を集め次代に伝えるための図書館の機能が紹介された。



vii 体験活動支援施設による防災教育

北海道青少年体験活動支援施設ネイパル森社会教育主事 石山 浩幸 氏

ネイパル森で行った防災教育事業「めざせ防災マスター」の紹介を通して、体験活動施設による防災教育の説明があった。説明の中で、「ハイゼックス炊飯袋」など簡単な防災グッズを活用した体験活動例や簡単な食事、火おこしの方法など市町村における防災教育事業にすぐに活用できそうな具体的な事例が紹介されていた。



(6) 社会教育基礎講座「生涯学習・社会教育に関する基本的事項や今日的な課題について」

講師 オホーツク教育局教育支援課社会教育指導班主査 為 広 千 里 氏

〔1 日目 15:30~17:15 1070 会議室〕

本講座は、社会教育行政 2 年未満の参加者のうち、希望する 41 名が受講した。参加者は、初めに、話し合い活動をスムーズに進めるための「アイスブレイク」の手法を「自己紹介」や「ミニゲーム」などの実際の体験を通して学んだ。続いて、「生涯学習・社会教育の基本事項」として、社会教育の目的や社会教育主事の役割、現在の国や北海道の社会教育の流れについて説明を受けた。特に、学校と地域が連携・協働し、地域ぐるみで子どもたちをはぐくむ環境をつくることで学校を核とした地域活性化を促進する「コミュニティ・スクール」の目的、取組について理解した。最後に、参加者自身が担当している業務内容や困りごとと交流した。

Ⅱ 事業の成果と課題

[成果]

- ・関係機関の協力により、ポスターセッション形式の事例紹介といった新しい内容に取り組むことができた。改めて社会教育行政以外が取り組むまちづくりについての情報提供することができた。
- ・経験年数を考慮したグループを構成や最終的な成果物をまとめない形式を取り入れたことでグループ協議が活性化した部分もあった。今回の方式を正解とせず、今後も研究協議が活性化する環境づくりを考慮する必要がある。

[課題]

- ・内容が「防災」に偏りすぎているという意見があった。サブテーマ「災害に負けない地域コミュニティの形成」をもとに防災を切り口として地域コミュニティについて内容としたが、参加者に「防災」と「社会教育行政」とのつながりについて、具体例を用いて説明するなどの必要があった。
- ・ポスターセッション形式の事例発表において、発表者の声が聞き取りにくい会場があったことから、会場設営について工夫する必要がある。

1 セミナー全体について

(1) 参加者アンケートの集計（満足度／高←A・B・C・D→低）

満足度	A	B	C	D
	52%	44%	4%	0%

(2) 参加者アンケートの記述

- 全道の社会教育担当者と交流して刺激をもらった。テーマに沿った内容であり、持ち帰る材料が多かった。
- 他機関の事例を聞いたのは新しい試みだった。
- 研修会全体を通して、ストーリーが練られていて、参加しやすかった。
- 正解はないのです。考える方を重点化したのは良かった。
- 学ぶことが多く、また災害の内容で震災があったあとのすぐ学習できたのでよかった。
- 災害を通じた社会教育行政の在り方について勉強になった。
- 社会教育課に配属になって2カ月なので、社会教育基礎講座であいまいな部分などを詳しく聞いたので良かった。
- 他市町村との交流はとても良かった。普段あまり接点のない方々と話せる貴重な機会になった。
- ▲ 1年間で研究のビジョンがなく、2月の地域活動実践交流セミナーにつながらない。
- ▲ 社会教育セミナーの内容が防災に寄りすぎている。
- ▲ あまりにもサブテーマの災害が強すぎて、メインテーマについて考える機会が少なかった。「目標」を考える上で、サブテーマの手段を考え出していくのではないのか。
- ▲ 自治体の防災（災害対応）の部署の職員と一緒に受講して話し合いができればよかった。

2 行政説明について

(1) 参加者アンケート（満足度）の集計（満足度／高←A・B・C・D→低）

満足度	A	B	C	D
	51%	44%	5%	0%

(2) 参加者アンケートの記述

- 「時代に合わせた人を育てていく」「教科書で学んだことがすべてではない」との言葉がとても記憶に残った。
- 社会教育事業等に参加する地域住民の固定化はどの地域でも同じ問題を抱えていると思った。
- 適切に絞り込まれた話で聞きやすかった。社会教育士の話は取得のため追加の単位を放送大学やgaccoでとれるといいと思った。
- 資料を読み解くのが大変そうですが、ポイントを絞っていただいたのでわかりやすかった。
- 社会教育について、現場での経験を生かして説明いただいたので良かった。
- 行政について、知らなかったことをよく知ることができた。
- 社会教育行政について、経験の浅い私にも理解しやすい説明でした。

- 勉強不足なところもあり、ところどころ用語がわからず難しかった。
- 要点がややわかりにくかった。知っている内容が多かった。
- 社会教育における地域づくりについて理解できた。

3 事例紹介Ⅰ〔パネルトーク〕について

(1) 参加者アンケート（満足度）の集計（満足度／高←A・B・C・D→低）

満足度	A	B	C	D
	64%	32%	3%	1%

(2) 参加者アンケートの記述

- 災害時に行ったことが社会教育につながっていることがわかり大変良かった。また、現場の生の声が聞けて良かった。
- 被災した子どもへのフォローと失敗談が参考になった。
- 被災地で行われたこと、現状が分かり、つながりの大切さがわかった。
- つながりや関係性がどのように活かされたのかわかり、テーマに向けて考えられることが多かった。
- 被災者だからこそ感じたことやマイナスの部分を知れたことが、とても貴重だった。
- 社会教育担当から見た災害の現場が語られて、もし自分の町だったら…とイメージしやすかった。
- とても分かりやすい説明だった。きれいごとじゃない、マイナス面も話していただいて良かった。
- 北海道の社会教育の力を見せつける良いパネルトークだった。職員以外の動ける人をつかまえたい。
- 被災地で実際に活動された方の話は、参考になりました。自分のまちだったら…？と考えさせられます。
- 災害を体験した職員の生の声を聞くことができた。何が必要か、できるかを考えさせられた。
- ▲ もう少しテーマにつながるようなコーディネートが必要だったのではないだろうか。
- ▲ トークテーマや論点をもう少し絞った話を聞けると良かった。

4 講演について

(1) 参加者アンケート（満足度）の集計（満足度／高←A・B・C・D→低）

満足度	A	B	C	D
	58%	30%	10%	2%

(2) 参加者アンケートの記述

- パネルトークに続いて防災について実体験を含めて学ぶことができて良かった。
- 聞き手が注目しやすい話し方、当時の状況がよく見え、防災意識が高まった。
- 人と人とのつながりが、重要な意味を持つんだと改めて感じた。
- 聞き手を意識した話の導入の仕方やクロスロードは新しい知識となった。
- 地域防災マスターとして聞かせてもらいました。今後の活動に役立つお話でした。
- 地域コミュニティ形成のヒントを得ることができた。
- 経験に裏打ちされた興味深い話を聞くことができた。
- 防災とは常に様々な人とかかわっていくことが大切であると思った。
- 社会教育行政としての方法論を知ることができた。
- “つながり”をつくることについて改めて考えさせられました。
- ▲ （参考になる話が多かったものの）防災というよりも地域づくりについてより聞きたかった。
- ▲ （講演の内容が）防災が中心となっていて、自分がいる地域の状況に合わない。
- ▲ 災害対策や、予防のことだけでまったくメインテーマに沿っていない。「サブをやってメインになる」と説明があったのに、この講演の内容を聞いてメインが達成できると（運営者は）考えているのだろうか。

5 研究協議について

(1) 参加者アンケート（満足度）の集計（満足度／高←A・B・C・D→低）

満足度	A	B	C	D
	57%	37%	9%	0%

(2) 参加者アンケートの記述

- 地域コミュニティについて、参加者でイメージすることができ、今後の業務に生かしたいと思った。
- テーマに対して、何ができるか考えることができた。他の人の話を聞き、イメージが沸いた。
- 他の市町村の状況が良くわかり、参考になった。
- 日頃からの活動が防災教育になっていくのだと思った。
- 話し合う時間に余裕あったことで、グループメンバーと深い協議ができた。
- 年数の近い参加者でのグループ構成だったので、気軽な雰囲気ですいろいろな話題が出たので楽しく学ぶことができた。
- 他の人の意見を聞けて自分の考えが大きく変わりました。
- いろいろなマチの行政を聞けるのですごく良い。
- いろいろな立場から話が聞けた。
- 社会教育行政の役割を再認識することができた。
- ▲ グループの構成は（参加者の地域の）人口を考慮してはどうだろうか。
- ▲ 防災のくくり（とらえかた）が難しかった。
- ▲ 1日目（の協議内容）は漠然としていて何について話せばいいかわからなかった。
- ▲ この時間を貴重な事例発表（パネルトーク）に回しても良かったのではないだろうか。
- ▲ 模造紙や付箋を使わない内容、異なる手法で運営してほしい。
- ▲ （協議内容が）あまりよくわからなかった。
- ▲ 研究協議の結果、管内でどう進めるのかわからない。
- ▲ ワークの進め方には、ちょっと理解しにくい点もあった
- ▲ 防災への関心が高まるものだった。災害について、これから深めていきたい。

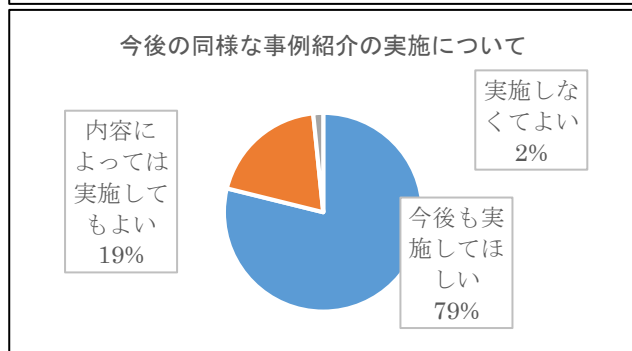
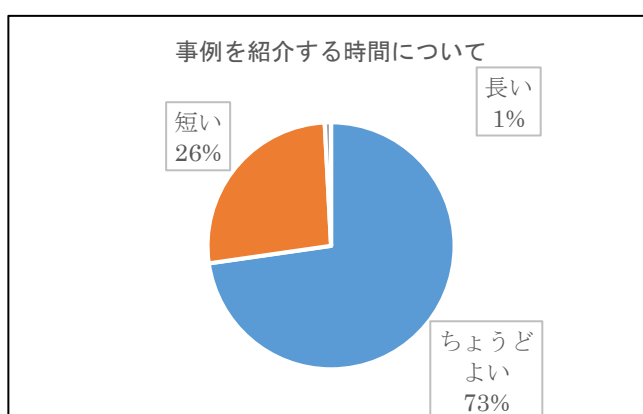
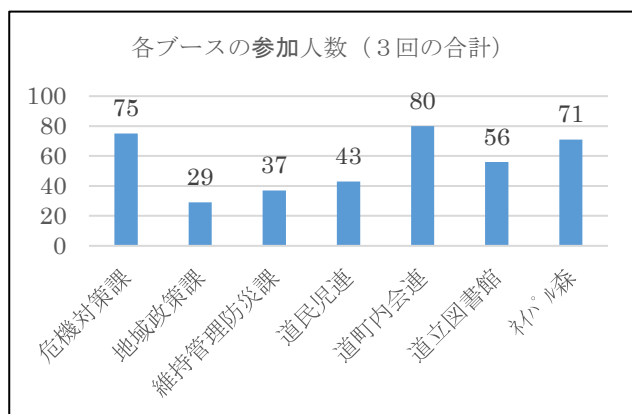
6 事例紹介Ⅱ【ポスターセッション】について

(1) 参加者アンケート（満足度）の集計（満足度／高←A・B・C・D→低）

満足度	A	B	C	D
	53%	37%	9%	1%

(2) 参加者アンケートの記述

- 北海道民生委員児童委員連盟の事例紹介内容がグループで協議していた内容と合致しており、ためになった。
- 普段、なかなか接点を持てていない部署（の事例）だったので、たくさん勉強になった。
- ネイパル森の事例のような体験を通した防災教育を実践してみたいと感じた。
- 直接聞いた方が分かりやすい。自分の地域に持ち帰り、検討したいものも見つかった。
- 短い事例紹介なのでわかりやすくすごくよかった。
- 各部局、団体で多くの（地域住民に対する）学習事業等を行っていることがわかった。
- いろいろな視点での取組を知ることができて良かった。せっかくなので他のブースも参加して話を聞きたいと思った。
- 防災は人と人とのかわり、様々なアイディアによってマニュアル以上の効果を発揮すると今回の事例で知った。
- 時間の制約は多少あっても様々な分野のいろいろな話を聞くことができるのは大変勉強になる。
- 様々なジャンルの話を少しずつだったが、関連する他部署の現状を知ることができた。
- ▲ 今さらこんな内容を学ぶのかと思ったが、他の地域の方は知らないことが多かったようで、自分が勤務する地域の意識の高さを実感した。
- ▲ 貴重な話を聞けて良かったが、もう少し時間をかけて掘り下げた話を聞けるとなおよかった。
- ▲ それぞれの課や団体が様々な取組をしているのは分かったが、どう連携をとりあっているのか等をもっと聞きたかった。
- ▲ 同じ部屋で3つの説明をしていると声がまったく聞こえない事例紹介もあった。（実施方法を）考えてほしい。



- 今後、希望する内容について
- 他の市町村の取り組み事例
 - ブースによっては、制度などの説明が多かった。それによる効果や取組方法などもっとミクロでの話を聞きたい。
 - ネパール森のような具体的に社会教育事業に直結する内容。
 - 実際の体験者による事例紹介。
 - 連携についての内容。
 - 北海道民生委員児童委員連盟の事例

7 自由記述

- 社会教育事業を通して、コミュニティを広げられる事業を町職員と共に考え、災害に負けない地域コミュニティの基盤をつくっていききたい。
- 多方面でつながりを自分自身がつくっていくことが必要だと思うので、それが実現するように努めていければと考えた。
- 地域コミュニティには、いろいろな（それぞれの）部署しか知らないコミュニティがあると知った。
- 社会教育行政職員として、今後どのように防災に関して関わっていけるか、各部局と連携して悩みたい。
- 教育行政だけで解決できる課題は少ないので、他部局と連携を深めたい。
- 地域コミュニティの必要性和日常的なコミュニケーションの大切さを感じた。
- 防災教育を通じて地域コミュニティの形成と今後の事業に活かしていきたい。
- 子どもたちの防災意識を高めることから、地域の発展につなげられるような長期的な視点で取り組みたい。
- すぐに実践できる内容で、大変勉強になった。普段から「つながりづくり」を意識して事業実践していこうと思った。今まで防災に関する事業はやってきていないので、これを機に何か取り組んでみたい。
- テーマが難しく、その分、今回のセミナーを工夫されたと思うが、結果的に例年より実りある研修となった。コミュニティとは何なのか、もう一度見つめなおして今後の活動につなげたい。
- 他市町村職員との交流、これが何より来てよかったと感じる部分である。セミナーを通して社会教育担当としての意識をより持つことができ満足である。様々な市町村との関わりができてとても良かった。地域づくりのひとつのきっかけとしての「防災」であるべき。防災について、防災に強いコミュニティづくりが目的であると混乱が生じると思う。
- ▲ 防災教育を切り口として、“地域づくりの担い手”を育成するという目的だったが、担い手育成まで話が深まっていかなかった印象があったのは少し残念だった。
- ▲ 研究協議の情報共有はあまり必要ないのではないか。何を発表しようと考えてしまい、話に集中できない。教育行政に沿った進め方を考えほしい。
- ▲ 行政と住民の連携・協働について理解を深められず、残念だった。結局、いつもどおり「つながり」に落ち着いてしまう。もう何年もつながりが重要って落ち着いてしまうのが心残りである。
- ▲ なぜテーマ説明で資料を用意しないのか。なぜ災害対策ばかり学んでいるのか。
- ▲ ポスターセッションにおいて社会教育の視点が皆無な事例が見られた。厳しい。